



介護リスクマネジメントNEWS

利用者が施設の廊下で転倒した事例

Aさんの言動は「いつも通り」と油断をしていなかったか

サービス種別 入所施設

トラクレ種別 転倒

発生場所 施設内

介護状況 単独

本人の状態 擦過傷

ご利用者Aさんの状態

- Aさんは、事故発生時79歳の女性。5年前にアルツハイマー型認知症と診断され、自宅で家族と生活していたが、物とられ妄想の深刻化や外出後に帰宅できなくなることが増え、1年前に有料老人ホームに入所した。要介護認定は要介護1。
- 事故当時、Aさんの歩行は自立しており、支えなく一人で移動ができていた。杖や介助を必要としておらず、転倒歴もなかった。
- Aさんには、日常的に物とられ妄想が見られ、職員や他の利用者に対して疑念を抱くことがあった。また、時間や場所の認識が不確かで、「ここはどこ？」と尋ねる場面も時折見られた。

事故発生時の状況

- 14時ごろ、Aさんはレクリエーション（塗り絵）に参加した。Aさん含め8名の利用者が参加しており、職員B、職員Cの2名が対応していた。
- 14時15分ごろ、Aさんは、集中力が続かなくなったのか、「部屋に帰りたい」との訴えがあった。これはAさんがレクリエーションに参加した際によく見られる言動であったため、職員Bは「とても素敵にできているので、最後まで頑張って完成させましょう」と声をかけ、Aさんは塗り絵を続けた。
- 14時20分ごろ、他の利用者の対応をしていた職員Bが室内にAさんの姿が見えないことに気づいた。職員Cも、他の利用者から声をかけられてAさんが離席したことに気づいていなかった。
- 職員BがすぐにAさんを探して廊下に出たところ、10mほど先の廊下の床にAさんがうずくまるように倒れていた。職員Bが「大丈夫ですか」と声をかけると、Aさんから「痛い」と訴えがあった。意識はあるが、混乱しており、「ここはどこ？」と繰り返していた。
- 14時25分ごろ、知らせを受けた看護師が到着し、「痛い」と訴えがある右手と右膝に擦過傷を確認。骨折の疑いは低いが、念のために整形外科の受診を施設長に報告した。Aさんは「なんでこんなことになったの？」と混乱気味であった。
- ご家族に報告のうえ、外部の医療機関で検査を行った結果、軽度の打撲と診断され経過観察となった。

皆さんで考えてみましょう！

Q. トラブル予防の観点から、何ができたでしょうか？



利用者が施設の廊下で転倒した事例

Aさんの言動は「いつも通り」と油断をしていなかったか

今回のトラクレ事例の対応から学べることを考えてみましょう！

この事例の対応のポイント

今回のトラクレ事例の対応のポイントを3つあげてみました。これ以外にも様々なポイントが考えられると思います。みなさんも意見を出し合ってみてください。

ポイント①： Aさんの「今」に目を向ける

- Aさんの「部屋に帰りたい」という言葉を「いつものこと」と流さず、一度立ち止まって、Aさんのその時の様子や表情、声の調子に注意を向ける。
- Aさんのいつもと同じ言葉も、その背景は毎回異なるかもしれないという視点を持ち、「今日は少し様子が違うかもしれない」と感じたら、職員同士ですぐに共有する。

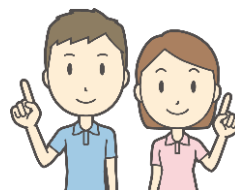
ポイント②： 常に安全を守ることを意識する

- レクリエーションの前に、職員同士で「誰がどの入居者を見ているか」を決めておき、利用者の動きや表情に注意を払う。
- 認知症のある方は集中力が途切れると、突然立ち上がって移動することがあるため、離席の兆候（集中力の低下、そわそわした様子など）に気づいたら、すぐに声をかけて対応する。

ポイント③： 過去の情報に頼りすぎない

- 認知症のある方は、日々の体調や気分、環境の変化によって、状態が大きく変わることがあるため、過去の情報だけで判断せず、「今はどうか」を見極める視点を持つ。
- 状態の変化に気づいたら、他の職員と情報を共有し、必要に応じてリーダーや看護師に相談する。また、記録に残すことも忘れない。

事故を防ぐために必要なのは、特別な技術や知識ではなく、日々の小さな気づきと丁寧な対応です。スタッフ一人ひとりが、「いつも通り」に潜むリスクに気づき、利用者の安全を守る意識を持つことで、職場全体の安心感が高まります！



<情報提供元>

東京海上日動ベターライフサービス株式会社
ソリューション事業部